

33. 過疎地域(小地域)における住民主体の地域福祉推進と 社会福祉協議会の支援方法の開発

長井 一浩 / 佐々木 千香子 (社会福祉法人松阪市社会福祉協議会 地域福祉課)
福本 馨 (自治会長・地区福祉会会長) / 永田 祐 (同志社大学社会福祉学部)
橋川 健祐 (社会福祉法人三重県社会福祉協議会 総務企画部)

【目的】

本研究の目的は、過疎地域(特に小地域)においてそこに暮らし続けたいと願う住民の地域生活を支えること、住民主体で地域を活性化・再生していくことの2点を具体化するための社会福祉協議会(以下、「社協」)を中心とした支援手法を、松阪市波瀬地区を対象に住民と共にアクションリサーチを行うことで明らかにすることである。同時に、研究成果を他地域へと発信し、同様の課題を抱える地域の社協や行政の支援手法に貢献することも目指す。

参考:今回研究対象としている波瀬地区は、松阪市を河口とする櫛田川の源流部にあたり、高見峠を越えれば奈良県に接する県境の限界集落である。かつては、林業で栄えた山村であるが、現在では少子高齢化が進み、後継者不足と産業の育成が大きな課題となっている高齢化率56.2%(平成21年10月1日現在)の地域である。

【方法】

三重県・集落機能再生「きっかけづくり」推進事業とのタイアップ

三重県下の農山漁村は、過疎化等により、集落機能が低下している。このような状況に対して、農林水産業や農山漁村を支える新たな地域コミュニティ形成を実現するため、地域住民が自らの地域を知り、未来に向かって考え、行動する機運づくりが大変重要である。この課題解決のため、県が主催となり集落機能再生「きっかけづくり」推進事業を以下の3つの方法により実施した。

そこで我々は、本事業に、地域住民に近い立場で地域住民とともに参加し、それらが有効かどうか検証を行うこととした。なお、本事業を実施するにあたり、東京農工大学の福井隆先生をお招きし、ワークショップにおけるファシリテートにご協力いただいた。

(1) フォーラム、意見地図づくり

「地域の魅力づくりフォーラム」を開催し、現在の行政依存体質から脱却し、自ら行動を起こすことで地域を活性化させていくプロセス等を、全国の取組み事例を交えて講演いただいた。その後、ワークショップを実施し、獣害問題や林業衰退に伴う後継者不足など、波瀬地区の切実な問題や、自然豊かな環境を活かして行く必要性などが話し合われた。挙げられたさまざまな課題や良い点について評価した結果が、表1に示したものである。「山・

川・水など美しい自然」を高く評価し、そこから波瀬地区の将来を切り開く可能性を感じている結果が示された。

表1 波瀬地区の困っていること良いところトップ5

順位	項目	主な意見
1	山・川・水など美しい自然	・山百合の花や山野草など美しい自然を残したい ・櫛田川の清流 ・おいしい水
2	獣害被害	・猿や猪の被害で耕作放棄地が増えている ・獣害で何も作れない ・作る楽しみが奪われる
3	林業の低迷	・林業が低迷しているので収入がない ・木材の値が安い
4	人柄・人情がよい	・人を思う心、地域の為になる心、人情を残したい ・笑顔で挨拶ができる人達がいること
5	若い人がいない	・子どもがいない集落 ・若者の働く場所が少ない

(2) 資源写真地図づくり

前回の意見を参考に地域にあるもの（良いところ、悪いところ・・・）を写真に撮って持ち寄っていただいたものをもとに、5つのグループに分けて作業を行った。完成した資源写真地図は、グループごとに地図に込めた想いなどを交えて発表し合い、地域の共有を行った。住み慣れた地区であってもさまざまな視点から捉えられた写真から、見慣れた風景の違った一面を発見し、互いに改めて地区を知る機会となった。また、それぞれが想いを話し合うことで、地区を想う気持ちを相互に理解し合った。



(3) アイデアづくり

表2 波瀬を元気にするアイデアトップ5

順位	タイトル	内容
1	クレソンを特産品化に！	・いろいろな料理に使えるクレソンを栽培 ・家庭排水が一切ない最適な栽培環境をPR
2	グループで使おう！小学校の部屋	・結婚式場、デイサービス、子ども科学館 トレーニング場... ・校舎を生かすものは、地区住民だけ。
3	スギ・ヒノキで新たな産業	・杉の枝葉を利用して有機肥料等の開発 ・小径木を利用して新しいきのこの開発
4	波瀬の米のブランド化	・休耕田を復活し、米のブランド化 ・おいしい米を「波瀬米」として直売するシステム
5	波瀬のあそび・くらし体験学校	・都市の児童が田舎体験できる学校を開校 ・林業・農業・料理・趣味遊び

前回のワークショップで共有した想いから、それぞれに具体的なアイデアをイラストや文字でカードにまとめて持ち寄り発表した。32項目のアイデアが紹介され、参加者の点数投票によりアイデアに対する評価を行い、上位5項目について、実行の難易度、緊急度、役割分担について検討した。表2にもあるように「クレソン」「杉・ヒノキ」「米」を活

かして特産品開発を進める提案が上位となった。クレソンや米を特産品化することによって新たな産業を興し、同時に山を活かして杉・ヒノキに改めて光を当て、地域の将来を切り開きたいとの切実な思いがアイデアに反映された。また、廃校となった小学校の活用も多く支持され、地域の拠点としての機能に期待が集まった。

人材バンク調査シート

上述の事業実施結果からもわかるように、住民は廃校となった小学校の活用に期待している。そのため、どういった利用プランがあるか、小学校の跡地利用について地域住民の代表・行政らとともに検討を重ねた。そのひとつが人材の調査である。

何か活動をしようとするとき、主となるメンバーも限られているため、どうしても自分たちだけでできる内容を組み立てがちであり、地区のためとはいえ、結局他の住民からすれば“誰かが勝手に”しているものになりかねない。また、“ちから”を持っているにも関わらず、自ら声を上げることもなく、それを発揮する場所がわからずにいる方も地区にはたくさん潜んでいる。

そのため、小学校の跡地利用を検討するにあたり地区に埋もれている人材を掘り起こし、ひとりでも多くの方が関わっていただけるよう、人材バンク調査シートを作成した。これによって誰が・いつ・どんなことをできるのかを明確にすることができ、例えば小学校の跡地を利用した受入れプログラムを作成する際に、その根拠となる。

現在 17 名の方から、地域の歴史や昔の暮らし・遊び、伝統料理や農業、木工など、波瀬のために活かす“できること”が寄せられている。

【結果と考察】

(1) 方法を通して明らかになった支援方法

社会福祉協議会は、「地域福祉の推進を図ることを目的とする団体」として社会福祉法に位置づけられている。佐藤（2006）は、「社会福祉協議会の職員の本来の仕事は、地域の福祉課題を明らかにしてそれを地域住民みんなのものにし、課題解決の対策を立て、地域住民の協働促進、関係機関・団体・施設との連絡調整および社会資源の育成などの組織活動を行い、地域住民の問題解決能力を全体として高めていくこと」であるとしている。

【方法】の（1）～（3）では波瀬地区にある課題の把握とその共有化を図った。各回のアンケート結果から、参加した地域住民は、「かねてから苦慮していた地域づくりの方策の糸口が開かれる期待を持った」など、意欲がわく地域づくりの入り口が見えるフォーラムだったと評価している（（1）に参加して）。こうして、先進事例を学ぶことが自分たちの地域を見直すことにつながり、同時に課題等を把握することによって、新たな意欲を醸成することができたようである。次に、「こうして住民が協働して作業をすることから、地域の活性化の意欲が作られていくのだ」と感じている（（2）に参加して）。そして、3 回目の終了時には、今後への期待感を持って“出来ることから始めていく”ことに合意がとられた。

結果、これら一連の取り組みを通じて、地域の課題を地域住民が「見える化」したうえで共有を行い、その解決策を住民同士で導き出した支援方法は、有効であったと言える。

(2) 新たに見えてきた課題や視点など

今回用いた支援方法は、地域住民の主体性を高める手法としてはある程度有効であることは実証できた。しかし、実際にはその後の「アイデアを実現させる体制」を整えられていなかったことから、住民の主体性はそれ以上育まれることはなかった。むしろ、機運が減退してしまったといっても過言ではない。

つまり、支援方法として(1)～(3)のみでは不十分であり、その後の体制も含めて確立しなければ、十分な支援方法とは言えない。

しかしながら、一部ではあるが波瀬地区の地域福祉を推進していこうとされている方々もいる。その思いが一部の人だけで終わらないよう、地区全体へその思いを広げるため、(1)～(3)に次ぐ支援方法を開発することが、一歩先へつながると思われる。

【今後の方向性】

事業を通して気付いた点として、波瀬に暮らす人にとって、すべては日常・当たり前のことであり、改めて考えてみなければ自分たちの地域の良さを知ることはなかった。また、こうして住民同士で意見を出し合ったところで、“財産”に気付いてもどうすればいいか手法がわからず、せっかくの今後のビジョンが曇ってしまった。

今後さらに地域福祉を進めるにあたり、“地域は、そしてそこに住む住民は何を残したいのか”ということに主眼を置き、支援していくことが大切である。また、社協が推進、支援するコミュニティビジネスの事業モデルとして、社協が持つネットワーク、資源を大いに投入していくことが求められる。そのうえで、現在進行している今後の展開は大きく次の2点がある。

(1) 波瀬地区全体への動機づけ

*** 商業施設の出店 ***

波瀬地区のクレソンなどに興味を持っていただいた松阪市中心街にある商業施設のご厚意で、施設内の1区画を波瀬地区に無料で提供していただけることとなった。距離にして80kmはある施設において、どのような商品を出すか現在検討中ではあるが、波瀬を多くの人に知ってもらうため、波瀬をどう魅せる(見せる)か、その手法が問われている。また、売り上げのすべてを生活の糧として農家に渡すだけの単なるビジネスではなく、生きがいや介護予防も含め、高齢者が住み慣れた波瀬地区で安心して生き生きと暮らし続けられるよう、利益をどう地域へ還元し、循環させるかが重要となる。助け合いの相互関係のなかで豊かな暮らしを構築するしくみとしていきたい。

*** 座談会の取り組み ***

波瀬地区は年少人口4.1%(平成21年10月1日現在)であり、この地域で若い人材を“生む”ことは難しくなっている。また、アクセスがあまりよくないことから必然的に閉

鎖的な空間となってしまっている。そこで新たな風として、松阪市社協が実習の受入れなど通して日頃から結びつきの強い大学・学生や、限界集落に興味のある仲間と地域とを結び、座談会を開催する企画を検討している。地域として、日常生活になじんでいるごく当たり前の風景でも、外から見るとたくさんの可能性を秘めた地区である。若者が入り共に学び合うことで、いろんな人がつながり、新たなアイデアが生まれ、地域が活性化すればと考える。また、こうした機会を活用し、埋もれがちなさまざまな住民の声を理解したい。

こうして地区の住民に限らず、波瀬を想う人材を集めて協議の場を提供することも、その地域の可能性を広げるひとつの手段であり、社協としての専門的な支援手法のひとつである。

(2) 大学との連携

社協が可能なもうひとつのサポートとして、大学・学生の研究や実習としてのフィールドを提供することが考えられる。よりスムーズに関わっていただけるよういくつかプログラムを作成し、まずモデル的に協力していただける大学と協働して例えば次の3つの企画を実践したい。その方法が確立できれば、受け入れの大学や大学生を増やし、一時的とはいえ、学生が出入りする事で波瀬地区をさらに活性化させることができると考える。また、学生目線の気づきや情報等を学生管理のポータルサイトを用いて対外的に発信する仕組みも検討している。

各種調査等フィールド提供事業

波瀬地区を上げて各種調査等のフィールドとして各種機関に有料で提供していく。

限界集落の地域再生と自立

高齢化率 50%を超える地域で住み続けるための地域再生と自立の方法やあり方について大学生と共に検討し、取り組む。

食の安全・安心 ~ 中山間地域におけるブランド農業 ~

波瀬地区の風土気候を生かした波瀬ブランド農業の開発生産を大学、大学生と共にアイデアを出し合い形にしていく。

【経費使途明細】

消耗品費（トナー、インク）	45,717 円
調査旅費（学生旅費、波瀬までの旅費、視察調査旅費）	475,786 円
報償費（視察先お礼）	10,500 円
通信運搬費（資料等郵送料）	1,500 円
資料図書費（参考図書）	2,200 円
合 計	535,703 円